

## 徳器成就

子曰。吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲不踰矩(論語為政第二)

これは論語の中の有名なる一節である。感想を語るに先だつて、読めない人のために和文になおす。

「子曰く、吾十有五にして学に志し、三十にして立つ。四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳順い、七十にして心の欲する所に従ふも矩を踰えず」

### 志于学

「子」とは孔子自身のことである。

孔子はいわゆる、釈尊、キリスト、ソクラテスと共に世界の四聖の一人である。その孔子聖人が彼の一生を如何に見ているかを考えてゆきたい。

彼はもちろん宗教の人ではなく、徹頭徹尾倫理の人であり、道徳の人である。彼にはじまつたいわゆる儒学は、東洋倫理の根本であり、日本にも流れ来つて、日本の国民道徳を培つた。

「吾十有五にして学に志し」

もちろん孔子も十五歳以前にも学んだかも知れぬ。しかし真に学に志したのは十五歳である。

我らは満六歳で小学校に入学させられた。現在の日本の国民は義務教育として六ヶ年小学校にゆく。その上に高等小学校、補習学校、更に実業学校、中等学校、進んでは高等教育の機関がそろつている。かくて学ばない国民はなくなつた。聖代の恵みである。

しかし私は問いたい。果して真に学に志したか。ただ他律的に強いられたが故に学校に通つたのではないか。あるいは無自覚のままに年月をすごしたのではないか。

無学！ それは恥ずかしいことである。無学に気がついたとき、それほどの悲哀がどこにあるうか。

五十六十になつて自分の信念を民衆に伝えたいと思う人がある。燃えるような信仰もある。弁舌もかなりたつ。それなのにその人の言葉に誰も耳をかさない。あるいは時に民衆から嘲笑さえ受ける。しかも本人が自身の無学を恥じていない時など、聞くの方が恥ずかしい。

私が決して無学でないというのではないが、その時代が認容する科学的常識も、宗教、芸術に対する一般常識すら欠いている時、決して熱烈な信念も一般民衆に伝えることはできない。かう考えた時、学に志すことは真に生きる第一歩である。

学に志すということは必ずしも学校の門をくぐれというのではない。

いつたい我らは学校教育を過信しすぎる。医学、工学、必ず学校教育を必要とするものがあることはもちろんである。けれども学校にゆかねば学問ができぬように考えるのはまちがいである。

大学にゆけないことを悲観している青年はある。しかしそれは決して今日勉強しないでいい理由にはならない。

中学にも十分ゆかないで、大学以上の実力を有する人がある。学校にゆけた人だつてただ漫然と無為にすごした人は決して優れてはいない。彼らはただ学校の試験に合格しただけである。

もちろん学校に行けたらけつこうである。しかし行けない人も決して悲観してはならない。

学ぶこと、哲学すること、求めることなしには、生活の向上はあり得ない。

学に志す。女も学ぶべし。男子も学べ、老年も学べ、青年にしてもし学ばぬものがあるならば、彼は真の生活を棄てた者である。

高僧という高僧に無学者はいない。刻苦して学ばぬ所に頼山陽はいない。

「学に志す」それが向上の第一歩である。

### 三十而立

十五にして学に志した孔子が三十歳になつて自家の識見が立ったといふのである。たいがい人間がこの十五歳から三十歳の間の人生で一番大切な時を極めて呑気に過ごしてしまう。学びもしないし、修養もしない。真剣に考えてもみないで、ただいゝ加減に過ごしてしまう。

十五歳から三十歳まで、それは孔子の専心学んだ時である。

この間に性の問題もおきてくる。人生に対する華やかな空想理想も心を支配する。享樂に対する誘惑も強い。深い悩みも押し寄せる。習う時だ、動く時だ。向上発展、それもこの時代に胚胎する。中学生があたり墮落の淵に沈むのもこの時である。若い娘が都会の裏に、墮落するのもこの時である。

危険！一歩あやまれば一生は暗黒になる。努力する時、一生の礎はこの間におかれる。

青年諸君に警告する！

今日いかに考えつつありや、今日いかに謹みつつありや、今日いかに努力しつつありや、今日いかに学びつつありや。無学が知れる。無智がわかる。不徳に気がつく、貧弱さがわかる。それがわかればこそ努力する。手紙一本すら容易に書けない。ちよつとした専門的な書物を手にしてもそれが読めない。

青年団の大会の講師にまねかれて、団員諸君の五分間演説を拝聴する。あやしい声色を使って、講演集や雄誌の記事をまる覚えにしてならべる。一世の大政治家や大宗教家の形である。聞いていてさへ汗が流れる。尋常一年生が老人の着物をきてあるく滑稽さである。

十九や二十で、そんなにものがわかるだろうか。雛は雛で鳴けばいい。雛が親鳥の如く気取っているからおかしい。孔子聖人すら三十にして立つという。時は尊い。人生を熱愛するものにとつては特に尊い。

卒業式にもらった優等賞状をだして自慢している間に、自分よりは駄目だと思つた友がぐんぐんのびて、何時の間にかその前に頭すら上らぬようになる。

時は尊い。ただそれは精進努力の連続の人にとつてのことである。高僧の高座も、重役の椅子も、不朽の真理も、空席のままに汝のくるのを待つてはいない。

汝の努力の全体が因となつて、それに適当した世界を造る。他人の成功を運だというものは、それは真に人生を知るものではない。不運逆境を幸福に転回するもただ汝の努力によるのみ。

#### 四十而不惑

三十にして学ぶ者は、三十五になつても学ぶ。学ぶことはもちろん続く。しかし三十歳になつたものは学生ではない。そこには社会人としての実際生活があり、活動がある。学んだことを実際生活に実現しゆく時である。人生は学理だけ、理論だけではない。実際経験に生きた学問である。経験！ それはその人だけが体得する生きた人生である。

三十歳より四十歳、それは実力のためさるゝ戦場への進出である。一人前として社会も認める。どんな難事をも打ち破る元氣がある。春より夏へるときである。かく書いている私も、たつた三十四になつた青年である。孔子のいわゆる、四十にして惑わずの時に達せない。

四十にして惑わぬ、とは何を意味するか。経験と理想との合致、理義に通じ、常識にたけ、是非に迷わず、何者にも動かぬ世界のことである。

三十歳にして俊才といわれ、人物といわれた者が、その才をあやまり、その事業に失敗し、酒色に溺れ、投機に失敗し、あるいは自暴自棄に陥り、安価なる成功に腰を下して老人化する等、四十にして不惑の世界に入るためには、三十歳から四十歳までは真に謹んで着々と努力の世界に邁進しなければならぬ。

四十にして惑わずとは決して愚なる大胆や、くそ落着きを意味しない。社会皆人格の完成への道程である。

#### 五十而知天命

一粒の種子が二葉をきる。それだけ見た時には何だか知れない。茎が伸び、葉が出る。何の草だということがわかる。しかし如何に伸びるか、いかなる花を咲かすかそれは未知数である。

蕾が出る。開いた時、赤い花だとわかる。花はやがて果実となる。

五十歳といえれば最早老境の一步だという。軍人となつて五十歳となつた者が、もう大工にはなれない。そこには最早人生生活に対する幻影はない。空想もない。

事業に対して失敗したかも知れない。目ざした一切は予想通りにはゆかなかつたであらう。しかし人生に対する深い経験がある。

進取的ではないかも知れない。しかし青年にはわからない、動かすことの出来ない重さがある。

「五十にして天命を知る。」天地の間には動かすことの出来ない理法がひそむ。それを孔子は知ったのである。大自然の糸乱れぬ活動、世の治乱興亡のあと、人事の栄枯盛衰の相、人心の機微なる動き、そうしたものの裏に動く、真理のすがたを知る。しかし天命を知るといふことが、運命論者になったり、あきらめ主義になったり、老いぼれになつてしまふことでは断じてない。これが人生の真の生活であらねばならない。

### 六十而耳順

六十にして耳したがふとは、何を聞いても、聞く所、ただちにその理、心に通ずることである。

是非善悪の理、事を処する方法、全てわかることである。

普通なれば、老境に入るに従つて頑固になる。新しい世界のことがわからない。青年の言うことがのみこめない。耳したがうかわりに、かえつて頑迷無智になる。こうした老人ほど困つた者はない。

嫁と姑の問題は日本の家庭ではつきものといつてもいい。無智を無智と知らない老婆が、女学校出の嫁に、三十年昔のことを押し付けようとする。愚痴の心で曇つた顔が一年中晴れない。嫌がられるのが当り前である。

円満に大成された人格、体は老人になつても、心は何時までも若々しい。こうした老人は世の至宝である。子供の言うことがのみこめる。青年でも壮年でも、男でも女でも、その言うことがわかつて来る。何を相談してもきつと何か解決が得られる。その近所にいてさへ、高められるような気がする。ものゝ道理がわかっているから愚痴が出ない。腹を立てない。そんな人のもとには多くの人々が心豊かに生かされる。

農村の光であり、実業界の重鎮であり、一国の政治家であり、国家の名将軍であり、社会の先駆者であり、家庭の大黒住である。

### 従心所欲不踰矩

心のままに何をしてても常規を脱するようなことなく、自然に徳にかなうている。徳漸く大成したことである。我らはこの一句を聞く時、白髯を撫しつつ、書を読む高徳の孔子を想像する。

一切の衆生を教化して、彼の体得せる涅槃の境を、弟子たちの中に説きつくせる、積尊を想う。

念仏一つに浄化された聖親鸞を想う。

かくて地上に実を結べる彼らは、太陽が西の空を真紅に染めつつ、悠々と沈むように、地上から消えて永遠の世界にかえる。

「十有五にして学に志し、三十にして立つ。四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳順い、七十にして心の欲する所に従ふも矩をこえず。」

人生の理想的すがたである。



## 諸行無常

暮れゆく春はまた寂しいものであります。

花はもろく散つてゆきます。そうして世は浅緑の初夏になります。

若葉も緑に、緑も紅葉に、何一つとどまるものなく移り変つてゆきます。釈尊がおっしゃったように、ものみなは一物としてとどまるものがありません。諸法無我であり、諸行は無常であります。

諸行無常と言えば、何だか悲しいように感じます。しかし桜の花の咲くのも、若葉がつつやつやとかおるのも、ゆく雲も、流れる水も諸行無常であらねばなりません。ものが発展するのも、向上するのも、動くのも、輝くのも、光るのも、彩られるのも、全て諸行無常だからであります。

つつやつやとあざやかに輝く若葉のトンネルの中を自動車が進む時、大自然の美しい相を讚美せずにはいられませぬ。

日に日に新に変わればこそ、一分も固着せずに移ればこそ、一切が生きているのです。生きているのは動くことです。移ることです。

下関に来ました。一日乃木大将の御出世地長府に来ました。古典的なおいのする町です。そのかえりに関観台にのぼつて昼食をとりました。関門海峡は絵のように美しい。

私はひとり、平家がこの海に亡んだことを思いました。安徳帝が二位尼に抱かれて6海に入りたまいいもそこでありました。やさしい平家の公達や美しい宮仕へした上臈たちが、花が散るようにこの海に入りました。

散る花と、平家の運命とはあまりにもよく似ています。

ゆきくれてこの下かげをやどとせば 花や今宵のあるじなるらん

と歌う薩摩守平忠度卿の芝居は少年の時から心をひかれたものであります。

平家は一の谷から屋島に、屋島から壇の浦に美しい涙ぐましいロマンスを残しつつ花のように散りました。

「源氏となつて栄えんよりは、平家となつて亡びんのみ」

とはあながち、樗牛のみの感慨ではありませんまい。

平敦盛の青葉の笛……那須与一の扇的……物語の数々も昔の夢になつてしまいました。

泣き声も笑い声も、源氏のかちどきも平家の悲嘆も、時の前にはただ一片の夢であり幻であります。

大海の前に立つと大きな暗示に打たれます。偉大な人格の表象のようにも思われます。平和の女神でも生れ出そうであります。狂う海を見れば、「生死の苦海」とたとえた古聖の心も偲ばれます。

海は神秘そのものであります。

しかし私がうれしいのは、海の動きであります。

一時もじつと、とゞまりませぬ。

みちたかと思えば、去りはじめます。

平潮になつたかと思えば、また来はじめます。

太陽と月との引力がどうのというては面白くありません。満月が東の空にかかる時、ピツタリと潮がゆるやかに満ちます。大自然の一糸乱れず、動くように出来た相を讀えずにはいられませぬ。

ボートこぐ浜辺の波の上に、対岸の燈がキラキラとゆらぎます。

怒涛狂乱の波の音、難破した帆船がのまれてしまします。

油を流したような春の海に紺碧のうねりがあります。

こうして海は、無数の生物を抱いたまゝで、永遠に動きます。

華嚴経の中で、善財童子がたづねた五十三人の善知識の中には、海とむきあつて思いをねる聖者があつたように憶えています。

海には固定はありません。静けさも続かぬかわりに、荒れる日も続きませぬ。

千波万波、来る日も来る日も千波万波です。

大海には毎日く、多くの河が流れこみます。清いものも、濁つたものも流れ込みます。しかし彼は何時も清く澄んでいます。何という偉大な人格でしょう。

親鸞聖人は如来の大きな慈悲をたとえて、

「名号不思議の海水は逆謗の死骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば功德のうしほに一味なり。」

と申されました。まことに衆悪の万川、帰しぬれば、功德のうしほに一味でありませぬ。一如平等の大慈悲はいかなる悪人をも愚者をももらしませぬ。

とどまるものはくさります。動くことは清めます。大海はいかなるものが流れて来ても浄化します。自然の浄化であります。

「尽十方無碍光大悲大願の海水に 煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしほに一味なり。」

海はさながら如来の大悲大願の大信海にたとえられます。毎日く、煩惱の流れは海へくくと急ぎます。そうして海と一味になつてしまします。

草も木も皆のびます。それなのに人ばかりがのびませぬ。人の心はとらわれをつくるからであります。固定した考えに腰をかけるからであります。生々として日々に新たなる天地の様を見る時に、それを一体に日々輝かしくのびてゆく世界を念ぜずにはいられませぬ。

高慢なる姿はのびている姿ではありません。卑下に陥つたのもとらわれた姿であります。真実の世界には卑下と高慢とはありません。

彼岸の光明はいつも、私を卑下と高慢から救います。彼岸の光明は現実の指導原理であります。

私の生活が輝くためには、彼岸の招喚をはつきりせなければなりません。彼岸の招喚を現前の一念に聞信するものは、何時も満たされていると共に、たえず伸びます。

満されているが故におちつきがあります。伸ぶが故に永遠に若々しい人でありま

す。苦悩と恵み、その二つの一つでもが欠けると人生生活はありませぬ。若僧だけである時、死のみがあります。苦悩がない人生には生き甲斐がありません。しかし恵みが感ぜられぬ時、人は虐げを感じるだけで伸びる事は出来ませぬ。

お恵みと苦悩とのはつきりとした体験こそ宗教生活であるかもしれないませぬ。聖者たちは底なき人間苦を一身に荷負しました。と同時にそれを支えるものは、深い恵みの感じでありました。

苦悩が伸びんとする逆なる力を培えば、恵みはその力をのぼします。

寒い冬の雪の中に、早くも春のかすかな恵みを感じる梅もあります。

かくて一物もとゞまらぬ万有の姿は苦悩とお恵みの間にたえず動いて生きています。

花の散る夕べ、寺の鐘が聞えます。またなく哀れを感じます。

薄命な美人が、複雑な運命に翻弄されている悲劇を見れば、荒らくれ男も涙します。なぜ涙を催すかという事は、一つの神秘であります。

大地はかくて一切をのせて、現在から現在へと流れてゆきます。喜劇もあります。悲劇もあります。そこにははじめもなくそこに終点もあります。しかし、なされてゆくままに諸行は無常であり、一切は空であります。

大きな堂々たる男子が、子供の僅かな温情にでも動きます。

温情のただよう世界だけで人はおちつけます。そうです、冷たい世界では人はいらら

いらしつづ疲れてしまいます。だから人は湿い世界から温い世界へとたづねてゆきます。それは無理のないことでもあります。しかし生きてゆくとは苦悩を逃避することではありませぬ。本流からそれで、小さい世界にいたずらな安定にとどまれば、彼は大きな河に出ることは出来ませぬ。逃避する者は又享樂しようとする人であります。

弱いということは悪そのものであります。

大海は、時に大暴風にも出あいます。春の温かいそよ風にも出あいます。しかし彼は何でもさげませぬ。まっすぐい本道は一本しかありません。一切を背負ってゆきます。

じつと海を見つめる心がまたしても深く考えさせます。